

# 周手術期看護実習における手術見学実習が受け持ち患者の術後看護へ及ぼした影響 ～周手術期看護実習における学習内容の検討～

石渡智恵美

帝京科学大学医療科学部看護学科

Effects of surgical observation training in perioperative period nursing practice on  
nursing care after surgery for patients in charge  
～Examination of learning content in perioperative period nursing practice～

Chiemi ISHIWATA

キーワード：周手術期看護実習、手術見学実習、術後看護、看護学生、学習内容

## I. はじめに

文部科学省は、「看護学教育モデル・コア・カリキュラム」を公表し、看護基礎教育における臨地実習の位置づけを「看護の知識・技術を統合し、実践へ適応する能力を育成する教育方法の一つである」<sup>1)</sup>とした。また健康段階に応じた看護実践の中で、急性期にある人々に対する看護実践について「周術期にある人の特徴の理解と生命維持、身体的リスクの低減と症状緩和、安全と安楽の保持のための看護実践を学ぶ」<sup>2)</sup>ことをねらいとして示した。

本学における周手術期看護実習は、3年次のカリキュラムの中で成人看護学実習Ⅰ（急性期）として実施している。この周手術期看護実習での対象は、手術を受ける予定の患者であり、今回の学生実習で実践した周手術期における患者の回復過程である術後に焦点を当てて、看護実践を展開している。周手術期看護実習での診療科は、消化器外科・整形外科・呼吸器外科・泌尿器科・脳神経外科のいずれも外科系病棟で、平均在院日数は7.5日～10日と短期化の傾向である。従って3週間の実習期間の中では受け持ち患者が1名もしくは2名となる。周手術期看護実習では受け持ち患者の同意を得た後、手術室に同行し、そのまま手術見学実習を実践している。

手術室実習での先行研究としては、成人看護学実習で手術見学を取り入れている大学は80%と報告<sup>3)</sup>されており、手術室実習での学生の学習に関すること<sup>4-9)</sup>、手術室実習の内容に関すること（一部学習効果も含む）<sup>10-14)</sup>、手術室実習の満足度を高める要因<sup>15)</sup>などが明らかにされ、手術室実習での学習として、一定の学習成果を示している。著者の先行研究でも、がん患者を受け持った学生の手術室での看

護実践において、患者に声かけやタッチングで寄り添いながら患者と一緒に手術に挑んでいる気持ちをもつ等精神面を支えるケア<sup>16)</sup>が明らかにされた。

しかし、手術見学実習での学びが術後看護へどのように影響を及ぼしていたのかという研究は少ない。そこで、今回の研究で周手術期看護実習における手術見学実習が受け持ち患者の術後看護へ及ぼした影響について明らかにしたいと考えた。

## II. 研究目的・意義

本研究は、特に周手術期看護実習での手術見学実習が術後看護へ及ぼした影響に焦点をあてて分析し、今後の実習指導と教育支援の示唆を得ることを目的とした。本研究が明らかになれば、受け持ち患者の術前看護から手術見学実習を経て、術後看護までの一貫性のある教育支援が可能であると考えられる。

## III. 手術見学実習

### 1) 実習目標

手術中の看護を学ぶために手術患者と共に手術室に入室し、手術中の麻酔・手術の理解と患者への呼吸・循環動態の管理、手術室看護師の援助について、見学を通して学ぶことができる。

### 2) 実習方法

- ・3週間の実習期間の中で周手術期患者を受け持ち、患者の同意を得て手術見学実習を実施する。
- ・手術見学実習の当日の流れについては、事前に直前オリエンテーション（学内日初日）にて説

明を行う。

- ・手術見学実習当日は、手術見学チェックリストを持参し、自己チェックやメモを取りながら手術見学実習を行う。

#### IV. 研究方法

##### 1) 研究デザイン

質的記述的研究

##### 2) 研究対象者

研究対象者は、A短期大学看護学科3年生で周手術期看護実習後の成績評価後に研究同意が得られた者。

##### 3) データ収集期間

2014年12月～2015年2月。

##### 4) データ収集方法

手術見学をした学生に成績評価後、学びのレポート（無記名）を設置した回収ボックスに提出するよう依頼した。また、インタビューの同意が得られた研究対象者に半構造化面接法を実施し、インタビューガイドに基づいて、手術見学実習及び術後看護について自由に語ってもらった。面接は研究対象者ごとに1回ずつ行った。録音した内容は、研究対象者の承諾を得てICレコーダーに録音した。なお面接は、研究対象者の実習担当外の教員がプライバシーに配慮し、個室で行った。

##### 5) インタビューガイド

インタビューガイドは、学生が自己の看護実践を振り返り、想起するための手立てとして、以下の内容とした。

- 1) 手術見学を通して、学んだことはどのようなことでしたか。
- 2) 手術見学をしたことで、受け持ち患者の術後看護に活かしたことはどのようなことでしたか。

##### 6) 分析方法

- (1) 「手術見学実習での学習内容」は、学びのレポートの個々の記述を一文脈単位とし、学習内容の項目をコード化し、意味内容の類似性・相違性を比較検討しながら、抽象度を上げてサブカテゴリ、カテゴリ、さらにコアカテゴリを生成した。

- (2) 「手術見学実習がもたらした受け持ち患者の術後看護への影響」は、手術見学実習内容から術後看護への影響に関して、インタビューを行う。ICレコーダーに録音したデータから逐語録を作成し、データを抜き出してコード化し、コードの意味内容の類似性・相違性を比較検討しながら概念を抽出、さらに抽象度を上げてカテゴリを抽出した。質的研究でのコードはデータに則したラベルとし、カテゴリとはコードの類似した内容を集約し簡潔に表示した。データの分析や解釈にあたっては、信頼性・真実性を確保するために繰り返しデータを精読し、質的研究の経験をもつ研究者から継続的にスーパービジョンを受けた。

#### V. 倫理的配慮

本研究は、共立女子大学・共立女子短期大学研究倫理審査委員会の承認（KWU-IRBA#14064）を受けてから実施した。研究対象者に対しては、成人看護学実習Ⅰ（急性期）の成績評価後に研究内容の説明と録音、研究協力・参加の有無は、自由意思に基づくものであること、また協力を拒否した場合でも、いかなる不利益も生じないこと、研究結果は、調査以外の目的で用いないことやプライバシーの保護と匿名性の遵守、データの厳重な保管ならびに結果の公表について文書と口頭にて説明し、学びのレポートは提出をもって同意を得ることを説明した。また、インタビューに関しては、研究同意が得られた研究対象者への同意書の署名にて同意を得た。また、インタビュー日時は、対象者の教育活動に支障が無い日時を希望に合わせて設定した。

#### VI. 結果

##### 1) 学びのレポート回収率

手術室実習81名中回収数54名（回収率64%）

##### 2) 手術見学実習での学習内容（表1）

分析の結果、＜環境整備＞＜感染管理＞＜安全＞＜麻酔＞＜手術＞＜チーム連携＞＜看護師の役割＞＜患者ケア＞の8つのコアカテゴリと【患者に配慮した手術室の環境整備】【患者を守るための感染管理】【患者の安全を守るための看護】【麻酔導入時の看護】【生命維持管理中の看護】【円滑な手術を行うためのチーム連携】【看護師の役割】【患者への配慮】8つのカテゴリ及び23のサブカテゴリが生成

表1 手術見学実習での学習内容

コアカテゴリ	カテゴリ	サブカテゴリ	コード〔抜粋〕	記述されたコード数
＜環境整備＞	【患者に配慮した手術室の環境整備】	〔室内環境の調整〕	室内温度・湿度・採光・音量について、調整が大切であることを学ぶことができた	28
		〔物品・器材の配置〕	器材・物品配置の適切な配置について学ぶことができた	20
＜感染管理＞	【患者を守るための感染管理】	〔スタンダードプリコーション〕	手洗いなど感染予防行動の取り組みを学ぶことができた	43
		〔感染予防対策〕	ガウンテクニック、フェイスシールド、マスクの装着方法を学ぶことができた	37
		〔物品管理〕	手術物品の（日付・滅菌等）の管理の徹底を学ぶことができた	18
＜安全＞	【患者の安全を守るための看護】	〔転倒・転落予防〕	狭く・高い手術台への移動前の説明・注意について学ぶことができた	24
		〔ダブルチェックの重要性〕	患者誤認、手術部位の間違い予防のチェックの重要性について学ぶことができた	26
		〔神経損傷予防〕	良肢位・関節可動域の確認を学ぶことができた	32
		〔褥瘡予防〕	体圧・患者の体型に合わせた体圧マットを使用方法を学ぶことができた	28
＜麻酔＞	【麻酔導入時の看護】	〔口腔内の確認〕	脱落しそうな歯や口腔の確認方法を学ぶことができた	8
		〔意識レベルの確認〕	意識レベルの確認方法を学ぶことができた	19
＜手術＞	【生命維持管理中の看護】	〔呼吸管理〕	呼吸回数、呼吸状態（胸郭の動き）の確認方法を学ぶことができた	31
		〔循環管理〕	顔色・血圧・脈拍数・心電図による異常波形の確認方法を学ぶことができた	28
		〔体温管理〕	低体温・高体温の確認方法を学ぶことができた	24
		〔ドレイン類の管理〕	輸液量・排液量の確認方法を学ぶことができた	27
		〔術式の確認〕	予定術式の内容と変更がないかを確認していたことを学ぶことができた	24
		〔ドレインの確認〕	ドレインの種類・太さ・挿入位置の確認方法を学ぶことができた	20
＜チーム連携＞	【円滑な手術を行うためのチーム連携】	〔カンファレンス内容の確認〕	術前カンファレンス内容の確認を学ぶことができた	12
		〔医療スタッフ間の連携〕	申し送り・報告を徹底し、確認方法を学ぶことができた	30
＜看護師の役割＞	【看護師の役割】	〔患者の代弁者〕	看護師は患者の代弁者の役割があることを学ぶことができた	15
		〔患者の一番身近な存在〕	麻酔導入前後の患者への対応・ケアの重要性を学ぶことができた	12
＜患者ケア＞	【患者への配慮】	〔プライバシーへの配慮〕	患者の不用な露出を避け、プライバシーへの配慮を学ぶことができた	25
		〔ねぎらいの声かけ〕	手術を終えた患者にねぎらいの声かけを学ぶことができた	17

された。サブカテゴリは〔 〕で示す。

手術室看護実習での学習内容として、

- 2つのサブカテゴリである〔室内環境の調整〕〔物品・器材の配置〕から【患者に配慮した手術室の環境整備】が生成された。これは、手術室の特殊な環境下での室内温度・湿度・採光・音量について、看護師が患者主体となるように調整を行っていた。また器材・物品は、看護師が患者の入室に配慮し、配置されていたことを学生は学習していたことが確認された。
- 3つのサブカテゴリである〔スタンダードプリコーション〕〔感染予防対策〕〔物品管理〕から【患者を守るための感染管理】が生成された。ここでは、看護師を含めた医療者のス

- スタンダードプリコーション、ガウンテクニック・キャップ・マスク着用での感染予防対策の励行、手術物品等の感染対策管理方法を学生は学習していたことが確認された。
- 4つのサブカテゴリである〔転倒・転落予防〕〔ダブルチェックの重要性〕〔神経損傷予防〕〔褥瘡予防〕から【患者の安全を守るための看護】が生成された。これは、看護師が手術台の高さ・幅に注意を行い、患者に手術台の移動前に説明をして転倒・転落予防に注意を払っていた。また、患者や手術部位の誤認を予防するために看護師と医療スタッフのダブルチェックが行われ未然に事故を防ぐ取り組みについて学習していたことが確認された。

4. 2つのサブカテゴリである〔口腔内の確認〕〔意識レベルの確認〕から【**麻酔導入時の看護**】が生成された。これは、看護師が患者の口腔内を観察し、特に易欠損性の歯牙や下顎の開閉状況など入念に確認をし、誤飲防止に努めている姿を見て、これらの看護実践について学習していた。また、患者の意識レベルの評価については、看護師が後背部や肩甲骨部を叩打することによって、意識の程度を確認する方法を見て、学生は学習していたことが確認された。
5. 6つのサブカテゴリである〔呼吸管理〕〔循環管理〕〔体温管理〕〔ドレーン類の管理〕〔術式の確認〕〔ドレーンの確認〕から【**生命維持管理中の看護**】が生成された。これは、生命維持管理に関して、呼吸・循環・体温・ドレーン類の管理を間接手術介助看護師（以下、間接看護師）が実際に行いながら学生に説明し、手術進行中の患者の状態を確認していた。また、間接看護師が手術進行中に予定術式と変更はないか、ドレーンの位置についても医師に確認をして、誤認のないように進めていたことを学生が理解していたことが確認された。
6. 2つのサブカテゴリである〔カンファレンス内容の確認〕〔医療スタッフ間の連携〕から【**チーム連携**】が生成された。これは、看護師が術前カンファレンス内容の確認をし、その内容を医療スタッフ間で申し送り・報告を適宜行い、円滑な手術を行えるよう細心の注意を払うことを学生は理解していたことが確認された。
7. 2つのサブカテゴリである〔患者の代弁者〕〔患者の一番身近な存在〕からは、【**看護師の役割**】が作成された。これは、全身麻酔の導入時は、看護師は患者の代弁者としての役割を行い、患者の一番身近な存在として、タッチングを行いながら声かけする姿を見ることで、学生がこの行為を理解し、学習していたことが確認された。
8. 2つのサブカテゴリである〔プライバシーへの配慮〕〔ねぎらいの声かけ〕から【**患者への配慮**】が作成された。これは、手術を受ける患者の立場をきちんと考え、患者の不要な露出を避けるためのプライバシーへの配慮や術後の手術が終えた患者にねぎらいの声かけ

方法を学習していたことが確認された。

### 3) 手術見学実習がもたらした受け持ち患者の術後看護への影響（表2）

研究同意が得られた対象者は7名であった。インタビューの所要時間は、一人につき1回30分～45分程度（平均38分）であった。

手術見学実習がもたらした受け持ち患者の術後看護への影響は、【**病床環境整備の重要性**】【**感染予防の徹底**】【**術後患者の安全を守るケア**】【**早期離床のケア**】【**呼吸器合併症予防のケア**】【**術後合併症予防のケア**】【**創傷部位のケア**】【**患者の回復促進するための医療スタッフの連携**】【**看護師の存在**】【**患者の自尊心への配慮**】の10のカテゴリと20のサブカテゴリが生成された。

1. 手術室の<環境整備>からは、術後看護への影響として、2つのサブカテゴリである〔個別の療養環境整備〕〔安全・安楽な環境整備〕より、【**病床環境整備の重要性**】が生成された。手術室看護師が患者の術前訪問から得た情報より、患者に合わせた環境を準備し、多数の手術室器材が散在する中で、患者と医療スタッフの安全及び術中機能を考え、物品の配置を考慮し、狭い手術台からの患者による転倒・転落予防のための声かけとケアの実際を目の当たりにしたことで、学生は術後の受け持ち患者のADLと術後疼痛の状況に配慮した環境整備を計画し、常に術後患者の身体状況を確認し、安全な療養環境となるように活用できていた。
2. <感染管理>からは、術後看護への影響として、3つのサブカテゴリである〔スタンダードプリコーション〕〔感染予防の実際〕〔物品管理〕より、【**感染予防の徹底**】が生成された。これは、看護師による手術室での医療スタッフの感染対策を病棟でも同様に実施し、特にスタンダードプリコーションを徹底することで、学生はこれらのことが患者への感染も防ぐことができ、患者を守るための方法ということを理解し、実践的に考察していた。物品管理は、手術室実習で学んだ衛生的概念を病棟での物品配置や手袋・マスク・エプロン使用で感染予防に努めた患者ケアを実践していたことが確認された。
3. <安全>からは、術後看護への影響として、4つのサブカテゴリである〔転倒・転落予防

表2 手術見学実習がもたらした受け持ち患者の術後看護への影響

手術見学実習の学びのコアカテゴリ	術後看護への影響カテゴリ	術後看護への影響サブカテゴリ	術後看護への影響具体例
＜環境整備＞	【病床環境整備の重要性】	〔個別の療養環境整備〕	患者のADL（日常生活動作）や疼痛の状況に合わせた環境整備が必要だと考えた
		〔安全・安楽な環境整備〕	術後の身体状況に合わせて、安全・安楽を考えて環境整備を実施した
＜感染管理＞	【感染予防の徹底】	〔スタンダードプリコーション〕	スタンダードプリコーションを遵守することで、患者を守ることが理解できた
		〔感染予防の実際〕	患者への感染防止には、医療者の徹底が必要だと感じたので実施できた
		〔物品管理〕	物品の清潔・不潔の概念が、清潔ケアを行う際に必要であった
＜安全＞	【術後患者の安全を守るケア】	〔転倒・転落予防のケア〕	術後の安全を守るためにベッド周囲には十分気を配って配慮できた
		〔インシデント予防〕	患者の安静度等の段階を誤認しないように確認できた
	【早期離床のケア】	〔DVT（深部静脈血栓）予防のケア〕	術後安静指示により、臥床中の予防ケアの十分な実施につながり、完全離床を行うことができた
		〔褥創予防のケア〕	術後安静指示により、看護師さんと体位交換をし、褥創予防に努めることができた
＜麻酔＞	【呼吸器合併症予防のケア】	〔口腔内の確認〕	挿管後の口腔内の異常を看護師と一緒に確認できた
		〔意識レベルの確認〕	術直後の意識レベル確認時にリカバリー室での看護師を参考に実施できた
＜手術＞	【術後合併症予防のケア】	〔五感を用いた観察方法〕	視覚・聴覚・触覚を用いた観察方法を実施できた
		〔フィジカルアセスメント〕	術後日数に応じた系統立てたアセスメントの実施ができた
＜チーム連携＞	【創傷部位のケア】	〔創痛予防のケア〕	創傷部位が理解でき、疼痛への影響を最小にしたケアが実施できた
		〔カンファレンスの重要性〕	チームでのカンファレンスでの意見交換の重要性が理解できた
＜看護師の役割＞	【患者の回復促進するための医療スタッフの連携】	〔積極的なコミュニケーション〕	術後患者のケア時に複数の看護師と一緒にケアをすることができた
		〔看護師の役割〕	患者のニーズを理解し、先回りできるように努力した
＜患者ケア＞	【看護師の存在】	〔患者の一番身近な存在〕	患者に寄り添い一番身近な存在になれるよう努力した
		〔プライバシーの保護〕	清潔ケアなどは患者の羞恥心に配慮しプライバシーの保護に努めた
		〔ねぎらいの声かけ〕	手術直後の患者に手術が終わったことを伝える声かけを行うことができた

のケア〕〔インシデント予防〕〔DVT予防のケア〕〔褥創予防のケア〕より、2つのカテゴリである【術後患者の安全を守るケア】と【早期離床のケア】が生成された。これは、手術室看護師が患者の安全に配慮し、神経・循環障害予防や褥創予防のためのポジショニングや患者ケアを実施していた。このことを理解した学生は、2つのベッド上リスクである①術後患者の安全を守るためのベッド周囲の確認や術後安静指示によるDVT（深部静脈血栓）リスク、②術後疼痛による弊害で体位交換が自力でできないことによる褥創リスクについて、体位交換やベッド上での予防的ケアの重要性と必要性を考え、術後患者ケアを計画して実際の患者に対して看護実践を行っていた。

4. ＜麻酔＞からは、術後看護への影響として、2つのサブカテゴリである〔口腔内の確認〕〔意識レベルの確認〕より、【呼吸器合併症予防のケア】が生成された。これは、学生が術

中の麻酔導入時の気管内挿管から抜管までの一連の流れを確認したことで、術後の麻酔作用を理解し、進んで口腔・咽頭部の違和感の症状の確認や呼吸器合併症予防の観点から口腔ケアを積極的に計画し、実践的に実行する姿がみられた。また意識レベルの確認は、手術室看護師がリカバリー（回復）室で行っていた方法を直接学んだことで、学生が帰宅後患者の意識症状の確認を理解し、実践につなげていた。

5. ＜手術＞からは、術後看護への影響として、3つのサブカテゴリである〔五感を用いた観察方法〕〔フィジカルアセスメント〕〔創痛予防のケア〕より、【術後合併症予防のケア】〔創傷部位のケア〕が生成された。これは、手術見学を通して、人体の構造の理解と創傷の部位・大きさ、手術侵襲による生体の変化について、全身麻酔を導入すると間接看護師が視診の全身の皮膚色、フィジカルアセスメントの体温・血圧・呼吸の変化およびドレー

ン類からの排液内容と排液量を確認しながら麻酔医の指示で輸液量の調節を実施しており、常に視覚・聴覚・触覚等を用いて観察している。このことから術後患者を観察する時には術後日数に応じて全身を視診・聴診・触診を用いて観察し、系統立ててアセスメントすることに活かされていた。また、学生は患者の術後疼痛への影響を考慮した疼痛緩和ケア及び術後の生体メカニズムの変化を理解し、術後合併症予防のケアを計画し看護実践を行っていた。これは、受け持ち患者の手術見学をし、考察したことにより手術部位が認識され、術後の創部の位置やドレーン挿入部位が明確になり、創傷部位周囲の疼痛や感染予防の重要性を再認識し、術後緩和ケアを積極的に取り入れ実践につなげていた。

6. <チーム連携>からは、術後看護への影響として、2つのサブカテゴリである〔カンファレンスの重要性〕〔積極的なコミュニケーション〕より、【患者の回復促進するための医療スタッフの連携】が生成された。これは、学生は手術見学時に、術前・術後のチームカンファレンスを通して、患者の理解に努めることやチーム間での積極的なコミュニケーションを図ることを学習した結果、術後患者のケアに看護師とともに複数で看護実践できることで効率の良い看護ケアを患者に提供していた。
7. <看護師の役割>からは、術後看護への影響として、2つのサブカテゴリである〔看護師の役割〕〔患者の一番身近な存在〕より、【看護師の存在】が生成された。これは、手術室では麻酔の導入とともに患者の意識は消失し、看護師が患者に代わって対応する姿というロールモデルを見たことで、学生は術後の患者の心理や状況を理解し、先回りできるように努力する等の役割や患者の身近な存在として、患者に寄り添うことで、一番身近な存在になろうと努力する姿がみられた。
8. <患者ケア>からは、術後看護への影響として、2つのサブカテゴリである〔プライバシーの保護〕〔ねぎらいの声かけ〕より、【患者の自尊心への配慮】が生成された。これは、手術室では患者に対し羞恥心に配慮した対応が求められているため、実際に手術室看護師が声かけしながらバスタオル等で露出を

防ぐ対応を心がけていたことから、学生の術後清潔ケアにおいても患者の羞恥心に配慮し、患者のプライバシーの保護に努めていたことで看護実践を行うことができたと考えられた。また、手術後に手術室看護師が患者にねぎらいの声かけをしていたことから、学生も帰室後の患者に「手術が終わりましたよ」「手術頑張りましたね」というねぎらいの声かけを行っていた。これも手術見学効果もたらした看護実践の姿であった。

## VII. 考察

日本手術看護学会では、「手術看護とは、周手術期における患者の安全を守り、手術が円滑に遂行できるよう、看護を提供することである」<sup>17)</sup>と定義しており、今回の結果より、学生は、手術見学から<環境整備><感染管理><安全>を学ぶ機会となり、手術見学したことが、術後看護で【患者を守るための環境整備・感染管理・安全】につながり、患者の安全を常に意識し、実践に活かすことができていた。これは、池田らの「手術室看護師の看護実践を時系列で体験することにより、環境や治療の影響による不利益から対象の安全を守ることなど手術室看護師の役割を全体的に捉えることができていた」<sup>18)</sup>と述べていることに合致していると考えられる。

さらに看護学生として受け持ち患者と一緒に手術室へ入ったことで、患者のおかれた環境や麻酔・手術操作の実際を見学・体験したことで、患者のイメージが持て、手術室における学習から看護実践が生じたと考えられる。これは、原嶋らが、「受け持ち患者の手術見学は、直接手術中の患者に接することから患者の状況理解、手術患者のイメージなど得る学びは大きい」と述べていること<sup>19)</sup>や大谷らの「術前から患者と関わり、患者と共に手術室入室・退室するという受け持ち患者の手術見学をする実習では、術後を踏まえて術中の看護を捉えることができる」<sup>20)</sup>に合致しており、このような学びから術後看護での患者のからだところの両面を整えていくことに気づき、実践につなげられたと考える。

さらに、患者の回復には手術操作に伴う創傷部位が鮮明に記憶として残ったことで、からだに合わせたケアの実施に影響を及ぼしていたことが判明した。これは、堀越らが、「手術操作により患者の身体にメスが入る様子を視覚的に捉えることで、身体的侵襲やその侵襲が術後の生活に及ぼす影響、ポ

ディイメージの変化など、患者が抱えうる具体的な問題に対して、考えを馳せることが可能となる<sup>21)</sup>と述べていたことに相当すると考える。

そして患者へ術直後のねぎらいの言葉かけと配慮については、患者の代弁者としての手術室看護師の存在から強く影響を受けていた。これは、日本手術看護学会が示す手術室看護師の役割で、「手術室看護師が対象に対して担う役割は、麻酔中で自分の意思を伝えられない対象者の代弁者として患者のニードを満たす<sup>22)</sup>」と述べていることに合致していると考えられる。

以上のことから、手術見学実習がもたらした受け持ち患者の術後看護への影響は大きく、特に優れた手術室看護師の存在がロールモデルとなり、学生の態度や行動を含めた看護実践へ影響を及ぼしていたと考えられる。今後、手術見学実習と術後看護への関連やつながりについて、手術見学したことを意図的に学生に意味づけできるような学習方法や実習内容を検討していきたいと考える。

## Ⅷ. 結論

- 1) 手術見学実習の学んだことから、分析の結果、〈環境整備〉〈感染管理〉〈安全〉〈麻酔〉〈手術〉〈チーム連携〉〈看護師の役割〉〈患者ケア〉の8つのコアカテゴリと【患者に配慮した手術室の環境整備】【患者を守るための感染管理】【患者の安全を守るための看護】【麻酔導入時の看護】【生命維持管理中の看護】【円滑な手術を行うためのチーム連携】【看護師の役割】【患者への配慮】8つのカテゴリ及び23のサブカテゴリが生成された。
- 2) 手術見学実習が術後看護に影響したことは、【病床環境整備の重要性】【感染予防の徹底】【術後患者の安全を守るケア】【早期離床のケア】【呼吸器合併症予防のケア】【術後合併症予防のケア】【創傷部位のケア】【患者の回復促進するための医療スタッフの連携】【看護師の存在】【患者の自尊心への配慮】の10のカテゴリが生成された。
- 3) 手術見学実習がもたらした受け持ち患者の術後看護への影響が今回明らかにされ、特に優れた手術室看護師の存在がロールモデルとなり、学生の態度や行動を含めた看護実践への影響を及ぼしていたと考えられる。今後手術見学実習と術後看護への関連やつながりにつ

いて、手術見学したことを意図的に学生に意味づけできるような学習方法や実習内容を検討していきたいと考える。

## Ⅸ. 研究の限界と今後への示唆

本研究では、3年課程の看護短期大学での周手術期看護実習における手術見学実習が術後看護へ及ぼした影響に焦点をあてて分析したことを明らかにしたものであり、今回は学生の手術見学の学びのレポート及び研究対象者のインタビューからの結果のため、全ての看護教育機関に在籍する学生の現象として一般化するには限界がある。今後他の教育機関とも連携を図り、データ数を増やして、一般化できるようにしていく必要があると考える。

## 謝辞

本研究にご協力していただきました看護学生の皆様に心より感謝致します。なお本研究は、2017年度日本看護科学学会第37回学術集会にて発表した<sup>23)</sup>ものに一部加筆・修正を加えました。この研究では開示すべきCOI関係にある企業・組織および団体等はありません。

## 引用文献

- 1) 文部科学省：大学における看護系人材養成の在り方に関する検討会「看護学教育モデル・コア・カリキュラム」～「学士課程においてコアとなる看護実践能力」の修得を目指した学修目標～， pp.1-65， 平成29年。 [http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chousa/koutou/078/gaiyou/\\_icsFiles/afieldfile/2017/10/31/1397885\\_1.pdf](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/koutou/078/gaiyou/_icsFiles/afieldfile/2017/10/31/1397885_1.pdf)。 [2019.8.20]
- 2) 前掲書1)
- 3) 深澤佳代子：手術医学教育と研究の方向性 看護基礎教育における手術室看護の位置づけと教授方法について－手術室見学実習について－， *日本手術医学会誌*， 27（4）：296-298， 2006。
- 4) 溝部佳代， 鷺見直己， 武藤眞佐子：周手術期看護学実習における手術室実習の有効性－学生の手術室看護に関する学びと態度の変化より－， *看護総合科学研究会誌*， 10（1）：3-14， 2007。
- 5) 堀越政孝， 辻村弘美， 恩幣宏美他：手術室見学における学びの内容－術中レポート分析－， *群馬保健学紀要*， 30：67-75， 2009。
- 6) 石橋鮎美， 三島三代子， 別所史恵：成人看護実習の手術見学における看護学生の目標と学び，

- 島根県立大学短期大学出雲キャンパス研究紀要, 5: 211-219, 2011.
- 7) 池田奈未, 百田武司, 植田喜久子: 手術室実習における看護学生の学び, *日本赤十字広島看護大学紀要*, 12: 71-78, 2012.
- 8) 河相てる美, 中田智子, 今川孝枝他: 成人看護学実習における手術室実習での学生の学び-手術室実習記録からの分析からの考察-, *共創福祉*, 9 (1): 1-15, 2014.
- 9) 藤原正恵, 江口秀子, 葛場美那: 成人看護学実習Ⅱ(急性期)における学生の学び-実習終了後のレポートからの分析を通して-, *大阪青山大学看護学ジャーナル*, 2: 58-68, 2018.
- 10) 坂東孝枝, 雄西智恵美, 今井孝枝他: 成人看護学実習における「手術室見学実習観察項目表」を導入した実習の学習効果の検討, *The Journal of Nursing Investigation*, 11 (1, 2): 51-58, 2013.
- 11) 木村美津子, 中嶋真澄, 平井純子: 成人看護学実習における手術見学学生への学習内容提示による学習効果, *神奈川歯科大学短期大学紀要*, 1: 25-31, 2014.
- 12) 磯本暁子, 柘野浩子, 塩見和子他: 成人看護学急性期実習における受け持ち患者手術室見学の実習開始前自己学習目標と学習内容の分析, *新見公立大学紀要*, 36: 43-48, 2015.
- 13) 大滝周, 大木友美: 看護学生が手術室見学実習を意図的に臨むための教育的試み: 第1報-手術室見学実習記録用紙の作成過程-, *昭和学士会誌*, 76 (4): 451-458, 2016.
- 14) 大滝周, 大木友美: 看護学生が手術室見学実習を意図的に臨むための教育的試み: 第3報-手術室見学実習記録用紙を用いた学習効果-, *昭和学士会誌*, 78 (3): 254-263, 2018.
- 15) 小島さやか, 小林祐子, 帆苺真由美他: 周手術期看護学実習における手術室実習の満足度を高める要因-実習状況および手術室看護師・教員の指導との関連-, *新潟青陵学会誌*, 9 (1): 63-72, 2017.
- 16) 石渡智恵美: 周手術期看護実習におけるがん患者を受け持った学生の退院指導に至る看護実践のプロセス, *帝京科学大学紀要*, 15: 101-108, 2019.
- 17) 日本手術看護学会: *手術看護基準 (改訂2版)*, 44-46, メディカ出版, 2005.
- 18) 前掲書7)
- 19) 原嶋朝子, 加藤千恵子他: 周手術期看護実習における手術見学の感想からみた学生の学び, *足利短期大学紀要*, 29 (1), 23-27, 2002.
- 20) 大谷則子, 堀之内若名, 中井裕子他: 手術室見学実習における学び-二つの実習形態の比較検討による考察-, *OP nursing*, 21 (6), 98-107, 2006.
- 21) 前掲書5)
- 22) 前掲書17) 97
- 23) 石渡智恵美, 菱刈美和子: 周手術期看護実習における手術見学実習が術後看護へ及ぼした影響, *日本看護科学学会第37回学術集会 (ポスター示説)*, 仙台国際センター, 2017.